Making Magic Seed

kamome23

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Ｍａｋｉｎｇ　Ｍａｇｉｃ　Ｓｅｅｄ

【Ｎコード】

Ｎ２０１５Ｘ

【作者名】

ｋａｍｏｍｅ２３

【あらすじ】

時は中世。舞台は王立ウルスラ魔法学校。人々は魔法をつかえた。魔法の源を「アルケー」と言った。アルケーは“火”“風”“水”“土”それらを合わせることで魔法が使えた。そんな、時、舞台で始まる。入学して来た。一人の男のおはなし・・・

第0話　はじまりの日

時は中世
まだ貴族や王様が、国を統治していたそんな時代
舞台は王立ウルスラ魔法学校
学校の周りには、一つの都市が出来ていたそんな場所
人々は魔法をつかえた。
魔法の源を「アルケー」と言った。
アルケーは“火”“風”“水”“土”
それらを合わせることで魔法が伝えた。
各個人比率は火：？：水：？：風：？：土：？このように表されていた。
数値は5が最大、1が最低。5の人は、世界において数少ない。
そんな、時、舞台で始まる。入学して来た。
一人の男のおはなし・・・
～魔法学校・講堂～
「あなたの数値は、オールゼロです」

1人の男が、宣告された。
髪がぼっさぼさで、2枚目というよりかは、3枚目の男だった。
周りには、大勢の学生がいた。
『ざわざわ』
「ゼロだってよ」
「なんであんな奴がこんなところにいるんだよ」
「魔法使えないのにねー」
散々なことを言われた。
急に連れてこられて、いきなりはからされた。
そして何より
「俺自身…何にもわかってないんだからーーー！！」

少し戻って・・・
～俺の村～
王都から、かなり離れていて辺境の所に村がある。
海があって、山がある。そんでもって商人の通り道である小さな宿場町だ。
「おい、カイト。王立魔法学校から書状が届いているぞ」
いかにも、海の男っていうおっさんが来た。
まぁ、隣の隣のただの調子のいいオヤジなんだが
「なんで…俺の所に！？」
王立魔法学校と言えば、建国当時からある名高い学校だ。

そんなところから、俺に何の用があるのか？
『ビリィ』
思いっきり破ってみた。
中には、いい品質の紙が入っていて、王家の刻印が押されていた。
「入学許可書！？　何で入学できるんだ。」
偽物じゃないだろうな
「おまえ、あの王立魔法学校から推薦状が届いたのか？」
隣の隣のさらに隣のおじさんが、騒ぎ出した。
この村は、小さいからそんな風にしていると
「おーーえ～らいっこた！！」
ほら、こんな感じに、みんなに話が飛び回る。
そんなわけで、推薦状が来ただけで、村総出でお祭り騒ぎになるそんな村だ。

「喜べーーーーー！！」
「かんぱーーーいー！！」
「いやーめでたいね。うんめでたい」
村唯一の酒場の中には、入りきれないために、外にテーブルなどを集めて騒いでいる。
酒場の中は、修羅場だった。
裸踊りし始める人もいれば、泣きだす人もいた。
「あの！、王立魔法学校から推薦されるんだ。すごいことだぞ！！」
急に、話しかけてきたのは、まだバリバリ現役の猟師だった。
「推薦ってことは、授業料などは、無料だぞ！！ガッハハ！」
確かに、授業料なんかが、かからないのは嬉しいことだ。
「あ～そうだな」
いい加減な返事しかできない
それに未だ信じられなかった。いや、信じてない。
「めでたいことだ、俺たちの息子の門出を祝おう」
「もう一回乾杯」

隣のおやじさんが音頭をとると
『かんぱい』
もう、何回したか忘れてしまった。両手に数えれるぐらいまでは、覚えているが・・・
村長が話しかけてくれた。何歳か忘れたが、もうすぐ死ぬんじゃないかな
「王都までの、運賃ぐらいは、出してやるからの～」
王都まで運賃を出してくれるだけで、大変助かる
それに、いままで必死にためたお金がある。
「俺自身したいことないし……」

その時の流れに乗って、まぁいっかと思って。

緑色のリュックには、必要最低限の荷物と全財産をもってくたびれていて、はげている青色の魔道士の服を着て。
魔道士の服は、
「昔商人がたたき売りしているのを思わず買っちまって、それから使ってないんだ。いや～よく似合っているな」
そう言って、もらったんだ。

いって見ることにした。王立魔法学校に・・・・

徒歩と馬車に揺られること・・・
～3週間～

～王都・正門～
周りが城壁に囲まれていて、やけに豪華な門があった。
「やっと着いた。ここでいいよな」
門は、数人の衛兵がいた。

「さすがだな、王都」
道がわからなかったため、とりあえず王都に来ただけなので道を尋ねてみた。
「あのすいません。王立魔法学校ってどこにありますか」
いかにも古巣で昇格していなさそうな衛兵に聞いてみた。
「王立魔法学校は、ここから南の山を越えていかないといけんぞ」

衝撃的事実発覚！！
「え……山を越える」
はぁ！？あの山を越える…だと！
気が沈んでいくよ・・・

王都についてみると、その先に大きな山があった。
そう険しい山が・・・

～山中～
今の所、木しか見ていない。
「ここ、どこだよーーーー」
「…ここ…どこだ…よー」
俺の声が、反響した。
「ここは、山の中だよな。うん、山の中だ。」

暗いし、動物の鳴き声はするから怖いったらありゃしない

～1週間後～
「山を抜けれたーーーー！！！！！」
怖かったんだから
でも、食料が現地調達できたのは嬉しい！
「赤色のキノコは、食べない方がいい」

そこには、広い平原があった。
そして、その先に城壁があった。
「あれだな、まってろー学校！！」
なんか目的が違ってきてるような・・・

～3日後～
王都と比べると小さいが立派な城門があった。
「なめてたぜ、学校を」
建物を見えていたのだが、行くのに時間がかかった。
「学校へ、いくぞーーー！」

「王立魔法学校は、ここだな」
門が閉まっていたため叩いてみることにした。
『ガンガン　ガンガン』

「なんだ、お前はあやしい姿をして」
十分にお前のほうがあやしいお思うぞ俺は

自分の姿を見ると山の中を越えてたせいか、服が汚くなっていた。
だから、道であった子どもが俺を見た瞬間泣いていたのか。
ちょっと傷ついていてたんだから

「ちょっとこっちにこい」
二人の衛兵につかまった。
えっ何この状況！？
「俺は、ここの学生で、推薦状がここに」
「馬鹿なこと言うな、入学は2か月まえだぞ」

「えっ…二か月前って。届いたのが、一か月前だぞ！！」
くそー今初めて辺境な村を恨んだ。
『ズルズル～～』
引きずられて
小奇麗な牢屋に入れられた。

「だせーーーこのやろう」
看守に頼んでみたが
「うっせーだまってろ。」
「いたっ」
リンゴを投げられた

せっかく、来たのにこの扱いって・・・どう！？

～1日後～
「釈放だ」
「やっとか」
一日中寝ていただけなんだけどな
「身分を確認していた。校長が待っている」
「えっ、ってひきずらないで～～～。扱いひどいよ～～～！！」
出所できた

～校長室前！？～
「捕まえた少年を連れてきました。」
「入ってよいぞ」
「はい」
普通の校長室の中には、紫マントをかぶったババアがいた。
「これ、ババアいうな」
「えっ、俺の心が読まれた」

「お前は、わかりやすすぎなんだぞ。」
そして、ここまで連れてきた、憎き衛兵は、去って行った。
「ところで、ババア。なんで俺をよんだ」
「だから、ババアいうな。わしの名前は、モーガンぞ」
「モーガンのババアもう一回聞くなんで俺を呼んだ。」
「ババアいうな」
その時、体中に激痛が走った。
「いたっ」
おれは、Mじゃないんだぞ。
「お、やはり耐えおったが、フォフォフォー」
「不気味な笑いするなババア」
「口が悪いが、まぁいい。それでは、ついてこい」

〜廊下〜
『ズルズル〜〜〜』

「ってっかなんで、また引きずられてるんだーーーーー」
「口では、聞きそうにないからの〜」

場所変わって
〜講堂〜
「みな、集まったかの」
「はい、集まりました。」
前には、メガネをかけた。美人のお姉さんがいた。
「では、皆の衆、紹介しよう新入生のカイトだ。」
だだっ広い所だな
そして周りには、大勢の学生がいた。
「よろしく〜」
俺なりに手堅く挨拶をしてみた
「早速、魔力測定をしてもらおう」

変な機会が出てきた。
「カイト、それに触れてみろ」
ババアが不気味な笑みをしていた。

「測定中　測定中」
「だいじょうなんか、こいつ」

「測定結果出ました。」
「火：０．水：０．風：０．土：０です。」
「あなたの数値は、オールゼロです」

『ざわざわ』

「ゼロだってよ」
「なんであんな奴がこんなところにいるんだよ」
「魔法使えないのにねー」

散々なことを言われた。

「フォフォフォー。やはりな、皆の衆、よろしく頼むぞ」

そんなこんなで、魔力０の俺の学園生活が始まった。

第０話　はじまりの日（後書き）

修正・加筆しました。

次回は、カイトの学園生活スタート！？

第1話　ご飯を恵んで・・・

入学から
～3日後～

～学校・中庭（放課後）～
「いや～3日もたったか～でも、暇だなー」
魔法の使えないが、俺が授業を受けたところで何も変わらない。
実習も眺めているだけだ。
みんなも俺と同じ年齢なのにうまいよな～
まぁ、2か月も遅れてるからか。

『グゥー』
「腹減った」
今日は、朝から水しか飲んでいない。
なぜかというと
「金がなーいーー」
そうなのだ、持ってきたお金はすべて使ってしまった。
なんていっても、物価が高い。
学園の周りには、都市が出来ている。
いわゆる学園都市なんですよここは・・・
「トホホ…」
何もかも高い。
「高い！」

衣住は、タダなんだけど・・・
なぜ、食がない。

『グゥー』

お腹がさっきからなっている。

『グゥーグゥー』

「おぉ二回なった」

「さっきからうるさいですわ！！」

話しかけてきたのは、金髪の女性だった。

「何回もなって、みっともないですわ」

「しかたないだろ、何も食べないんだから」

「はぁ！？何も食べてないですって」

あきられた顔をされてしまった。

「そうなんだよ」

「まったく、中庭で本も読めないわ」

確かに手に本を持っていた。

「中庭は、みんなの物なんだから」

「関係ありませんは！！」

強情な女だね～

「じゃあ、何か恵んでくれよ」

「誰が、魔力ない奴にやるもんですか！」

「おぉ、俺ってそこまで有名人になってたのか」

3日たって、割り切った。

魔力ないのは、仕方ないもんね

「でも、これ以上なってもうるさいですし、手伝ってくれたら、考えてあげてもなくてよ」

「えっ、ほんとうか」

「嘘は言いませんわ」

堂々としていた。

「わかった何でもやってやるぜ」

「そう、では付いて来て」

～学校・教室・1－B～

俺の隣の教室だ
「ここにある本、図書館にもっていってくださる。」
目の前に、大量の本があった。
「お前、どんだけ借りたんだよ」
「私の名前は、お前ではなく。エルフリーデですわ」
「じゃあ、エーデな」
「勝手に略さないでくださる」
「えーではないか、えーではないか」
「ご飯、あげませんわよ」
「すいません。エルフリーデ様」
「よろしい、ではいきましょう」
「あの～～何で、手ぶらなんですか」
「あら、私に持たせるき……“ご飯”」
「はいわかりました」
ご飯の前には逆らえないね。うん

～学校・図書館～
「はぁ～～やっと着いたーー」
腰が痛い
「ご苦労様」
「それで、エーデ、飯は」
「約束は約束だから、行きましょう」

～学校・カフェ～
なんとこの学校は、カフェとレストラン二つあるのだ。
「さぁ、来ましたわ」
目の前に出されたのは、サンドウィッチだった。
「おぉぉ、ありがたい」
なんでもよかった。食べれるものなら
「食べるの早いですわね」

「腹減ってるからな」
「それでは、約束も果たせましたしこれで」
去って行った
「エーデか」
性格は、あれだけど意外に優しい奴かな。

～次の日～

～教室・１－Ｃ～
「腹減った」
昨日恵んでもらったけど、お金がないのは、かわりない。
「働けば」
後ろから声が聞こえた。
銀髪の…名前は、確か
「フィリップなんだ」
「フィリップじゃない。フィオナ」
無関心そうな様子だ
「ごめんごめん、フィオナ。いい募集しているところでも知ってるのか」
「私のお母さんが経営している酒場で募集している」
「それはラッキー、行ってもいいか」
「帰り付いて来て」
「分かった」

～学園都市・デヴェテンテ（放課後）～
「ここが私のお母さんが経営している。デヴェテンテ」
小さな酒場だった
『カラン　カラン』
「おぉ、お帰りフィオナ」
「ただいま、お母さん。働く人見つけてきたよ」

「それは、早速面接しないと」
いかにも酒場のおかみっていう人がこっちに来た

よし合格してやるぜー
「カイトと言います」
名前は大切だよな

「よし、合格！！」
「えっ！？何で」
「何でって、名前が気に入ったから」
本当に名前は重要だった！！
「よかったね」
「日給にしてくれませんか」
お金がないから今すぐに欲しいぐらいだ
「あぁいいよ、今日から働いていって」
「ありがとうございます」
その後、ひたすら働いた。
「お疲れさん、もうあがっていいよ」
１０時くらいに声をかけられた。
「まだ、大丈夫ですよ」
「いい心がけだね、それじゃあ頑張って」
ちょっとでも、お金が欲しい。

日付が変わろうとしていた
〜次の日（深夜）〜
「よく頑張ったね、はい。お給料とまかないだよ」
「あぁありがとうございます」
「お疲れ」
「お疲れさん」
フィオナもこの時間まで手伝っていた。

「それじゃあ、明日もよろしくね」
「こちらこそよろしくお願いします」
まかないを食べた後、部屋に戻った。
「まかないおいしかったな～」

～教室・1－C（朝）～
「朝に、ご飯を食べれるのは、幸せだな」
満腹になっていて、満足していた。
～（1時間後）～
「ふぁ～～、眠い・・・お休み」

……。

……。

……。

～授業中～
「こら、起きろ」
『バシッ』
「いったいなー」
「授業中寝るとは、最悪だな」
目の前に青髪の女性がいた。名前は確か
「はい、はい。わかりました。シルファイ」
「シルヴィアだ。」
睨まれた
「すまん。すまん」
「しっかり聞けよ」
「りょ～か～い」

『スヤスヤ』

『ガンッ』
「起きろー」
「いったっ、殺す気か」
「いっそ、死んでくれた方がいいかもな」
「ひどすぎる」

頑張って起きていた。
「終わったー」
「今日も、頑張って労働しますか。」

そうやって、こっちに来て、初めての休日を迎えた。

第1話　ご飯を恵んで・・・（後書き）

修正・加筆しました。

次回は、カイトが初の休日を迎えて・・・??

第2話　平和な休日を求めて

～初めての休日（朝）～
「こっちにきて、初めての休日だーー」
なんといっても、学園都市は活気がある。
それに、俺の懐にお金もある。
「ヤッホー」

～市場～
「にぎやかだな」
たくさんの人で賑わっていた。
いろいろなものを売っていた。
「うちの林檎は、やすいよ～～」
「いい生地入ってきましたどうですか～～」
「王都から、薬が届いたよどうだーい」
「姫様どこですかーー」
姫様大丈夫かよ
そのまま市場散策していた。

「うぇ～～～ん」
泣き声が聞こえた。
その方に行って見ると、ちょっと白みがかった黄色の髪の小さな女の子がいた。
「よしここは、人助けと行きますか。

「あの、大丈夫」「あの　大丈夫かな」
声が重なった。
隣には、茶髪の女性がいた。
「迷子になったの」

「よし、じゃあお兄ちゃんとお姉ちゃんで探してあげる」
ウィンクしてみた。
「そうだよ、どこでお母さんとはぐれたのかな」
「市場で買い物してた時、エレナが勝手に行っちゃたから」
「そうかーエレナちゃんて言うんだな、よし一緒に探そう」
「探しに行きましょう」

「エレナちゃんのおかあさ〜〜ん」
「エレナちゃんのお母さんいませんか」
「お母さーん」

……。

…。

「あぁ、お母さん」
見つけたようだ。
エレナちゃんのお母さんも、白みがかった黄色の髪で気品であふれていた。
「あら、娘のエレナを探してくれてありがとうございます。それでは、またご縁があったら」
「それじゃあ、またねエレナちゃん」
「またね」
「うん、バイバイお兄ちゃん、お姉ちゃん」
二人、手をつないで帰って行った。

見えなくなった時に隣にさっきの人がまだいた。
「一緒に、探してくれてあんがと、えーと名前は…」
「王立魔法学校学生のフィーナと言います。こちらこそありがとう」

「同じ学校なんだ。俺は、1年のカイトだよろしく」
「同じ学年なんですね。私はA組です」
「俺は、C組」
「カイトさんそれでは、用事があるのでこれで、あとウィンクはしない方がいいですよ」
『グサッ』
刃物で刺されたみたいに心が傷ついた。
「あぁ、またな」
ウィンクは、封印したほうがいいのか・・・
昼時になっていた。
適当にお昼食べて、観光することにした。

～噴水前（夕焼けが見えるころ）～
「いやー夕日きれいだねー」
心が落ち着く。

感慨にふけていると
「おい！！服にアイスクリームがついたぞ！」
「許してください」
いかにも悪そうな人が親子に絡んでいた。
「これは、弁償だな」
「お母さん許してあげてよ」
「うるさいな！小娘」
殴ろうとしていた。
「ちょっとぐらいで、怒らない方がいいだろう」
そこを止めに入ったのは、赤髪の女の人だった。
「なんだとこの野郎」
「大人げないと言っているんだよ！！」

「俺は、魔法が使えるんだぞ。けがしてもしらないぞ！」
「魔法で来るなら・・・こちらも魔法で」
一触即発だった。だから、
「まぁまぁ、お二人さんとも気を静めて、ここで騒いでもいいことありませんよ」

「なんだお前は、引っ込んでいろ！！」
「そうだ、君が出てくるところなんてないよ！！」
ちょっとむかついた。
「二人ともつかまりたいんですか。ここでドンパチやれば、衛兵が来ると思うんですけどー」
「確かにここでは魔法をつかえない」
女の人がバツ悪そうな顔をして言った。
「まぁ、そうだな。けっ、つけにしといてやる」
悪そうな人は、どっかいってしまった。
「ありがとうございます」
本日2回も感謝された。やっぱり人助けはいいね。

女の人が、こっちに来た。
「さっきは、すまなかった。冷静さをかけていたようだ」
「いえいえ〜」
「私は、王立魔法学校のジェシカだ、よろしく」
「俺も魔法学校の1年C組のカイトだ、よろしく」
「同じ学年か、私は1年B組だ」
1—Bというと、エーダのクラスと同じだな
「同学年か、よろしく頼む。救ってもらった例に夕食をおごるよ」
「救ってもらったって、大げさな。でも、夕食はおごってもらいます」
やっぱり素直が一番だよね。うん
「そうかそうか、では行こうか」

今日はやたら同学年と会うな～

着いたところは・・・

～デヴェテンテ（太陽が見えないぐらい）～

「なんだ、デヴェテンテか」

「おっ、お前知っているのか」

「知っているも何もここで働いていますから」

「そうか、いつからだ」

「えーと、3，4日前ですね」

「そうか、最近来てなかったからね。まぁ入ろうか」

『カランカラン』

軽快なベルの音が聞こえる。

「いらっしゃいって、ジェシカちゃんじゃないか！」

「こんばんは～！」

「それに、カイトじゃないか。」

「どうも～」

「どうしたんだい2人そろって」

「さっき、助けてもらって。そのお礼にだよ」

「そうかい、そうかい。かっこいいとこ見せちゃって、よっ男前」

「やめてよ、増長しちゃいますよ。俺」

フィオナがエプロンをつけて出てきた。

「こんばんは、カイト」

「こんばんは、フィオナ」

「じゃましているぞ、フィオナ」

「こんばんは、ジェシカさん。さぁ席に座って」

「休日も働いているんだ！？」

「そうだよ。カイトも働く」

「いや、俺は休日ぐらいのんびり過ごしたいよ」

「そう」
少し残念そうな顔をしていた。
「さあ、わたしのおごりだ存分に頼んでくれ」

「よし、じゃあこのメニューの左端全部」
「君は、遠慮というのをしらないのかね」
視線が殺気立っていた。
「っていうのは、冗談で鶏肉の香草焼きで」
「はい、鶏肉の香草ね」
「君は、面白いね」
突然言ってきた。
「そうですかねー魔力ないですけど」
言ってて悲しくなってきた。
「君が、噂の魔力がない男子か」
「そうですよ」
「ますます、面白い君は、気に入ったよ」
「ありがとうございますね」
その後雑談したり、食べたりした。
なぜか、途中からフィオナも入ってきた。

「ありがとう」
「こちらこそ」
「お店に来てくれてありがとう」
別れの挨拶をして、部屋に戻った。

騒がしい休日だった。
明日こそ平和な休日を・・・

第2話　平和な休日を求めて（後書き）

修正・加筆しました。

次回、カイトは、平和な休日を手にいられるのか！？

第3話　続　平和な休日を求めて　（誘拐編）

～休日・2日目～
「昨日は大変だったな～」
今日こそのんびりしたいものだ。

～噴水前（朝）～
『ザアーー』
「噴水の音はいいよな～」
噴水の周りは、パフォーマンスをしている人や、楽器を演奏している人たちがいた。
日陰のベンチに寝転がって
「朝から寝るとか・・・まぁいっか」
意外に早く寝れた

『スヤスヤ』

……。

……。

……。

～噴水前（朝か昼？）～
「ふぁ～、今何時だろう」

『グゥー』
お腹が鳴った。
昼ぐらいか

「飯食いにいこ」
適当な屋台で買って食べた。
「腹七分目くらいかな」

～市場（昼過ぎ）～
「あぁ、お兄ちゃん」
お兄ちゃんって、妹もった覚えないけどな～
妹ぐらい一人ほしいよな、やっぱりうん
「お兄ちゃん」
袖を引っ張られた。
「おぉ、お前は、エレナちゃん」
昨日会った子がにこにこしていた。
「無視するなんてひどいよ、お兄ちゃん」
ちょっと頬をふくらましていた。
「もう一回いって見て、お兄ちゃんって」
「うん、いいよお兄ちゃん」
なんかいい気分になる。
「どうしたんだ。また迷子か」
「うんうん、今日はつまらないから抜け出してきたの」
「おいおい、大丈夫なんかよ」
「大丈夫だよ～お兄ちゃん一緒に市場観光して」
お兄ちゃんと言われたら、だれでも頷いちゃうでしょ。
「ＯＫ、わかった」
「やったー」
この可愛い笑顔さえ見れれば満足
「お兄ちゃんが、何でもおごってやるから」
調子に乗った
「やったーうれしい。はやく、いこ」
袖を引っ張られた。
目が輝いていた。

場所変わって
～市場～
「昨日と同じでにぎわっているな」
「あれなに」
「あれは、林檎アメだよ」
「りんごアメ？かってかって」
「よーしわかった」
「あれ何」
「あれはな」
・
・　・　・
「おなかいっぱい」
「懐がさびしくなったー」
可愛い女の子のためじゃしかたないか
「次何したい」
「あれ、あれ」
「輪投げか。よし行こう」

～輪投げや前～
頑張って入れようとしていたが、なかなか入らない。
「はい…らない…よ～」
涙が目からこぼれそうだった。
「泣くな泣くな、お兄ちゃんが取ってあげるよ」
「本当やったー！」
涙が太陽で輝いて見えた。

「お客さん…すべて入ったよ」
輪投げのオッチャンが驚いていた。

『ザワザワ』
「すごい」
「すごいですは」

「ふん、どうだ。祭りのころに、輪投げを散々してたからな」
「お兄ちゃんすご～い」
エレナちゃんは、騒いでいた。
「はいよ、一等賞のヤギのぬいぐるみだよ！」
「うれしい！！。ありがとうお兄ちゃん！」
ヤギのぬいぐるみって、もうちょっとましなのなかったわけ
「それじゃあ、休憩しよう」
いつもの場所に行きますか

～デヴェテンテ（おやつの時）～
「いらっしゃい、ってカイトか」
おばさんが元気な声で言った。
「どうも」
「こんにちは」
「おやおや、昨日はジェシカちゃんをつれて。今度は、女の子かい」
「私の名まえはね、エレナっていうんだよ」
「そうかい、そうかい。エレナちゃんかい」
「おばさん、飲み物と、エレナちゃん何か甘いもの欲しい？」
「ほしい！！、ほしい！！」
目が太陽みたいに輝いていた
「じゃあ、適当に甘いもの」
「はいよ」
デヴェテンテは、酒場だけど、昼などは普通の食べ物屋になってい

る。
「はい、デラックススーパーパフェだよ」
「おいしそう」
目の前に出てきたのは、とてもでかいパフェだった・・・
「おいくらなんですか・・・」
「あんたの給料二日分」
「はぁぁぁーーー、いじめですか」
「あんたが、適当にっていったからじゃないか。それに男なんだろ」
「もう、いいですよ」
「おいしい」
「そりゃ、よかったよかった」
「俺は、よくないですよ・・・」

『パクパク　モグモグ』
どんだけで、食べるんだ。どこに入って行っているのか不思議だった。
「そういえば、フィオナはどこなんですか」
「あぁ、フィオナは、川に泳ぎに行ったよ」
「川ですか」
「あの子泳ぐの好きでね」
「へぇー、泳ぐの好きなんだあいつ」
ちょっと意外だった
『パクパク、モグモグ』
・
・　・
・
眺めているだけでどんどん減って行った。
おいしそうに食べている様子が面白かった。
パフェの底が見えてきたときに

「あぁいた」
「みーつけた」
あやしい黒服の2人の男が入ってきた。
「おまえ、よくも、さらったな」
「あのー何言っているのかわからないんですけど」
「お前を連行する」
「えっえっちょっと」
二人して俺を捕まえようとしていた

袖を引っ張って
「お兄ちゃん、にげよう」
あやしいから、ここは逃げるが勝ち
「よし来た。必殺」

『バッチン』
「猫だまし、いくぞエレナ」
「この野郎」
「おばさん、裏口かりますよ」
「はいよ、頑張んな」
楽しんでいる様子だ
「待ちやがれ」
起き上がって、こっちに来た
「必殺、フォーク投げ」
足に刺さった
「ぐは」
痛そう・・・
ダーツの経験が役に立った

～裏通路～
「なんで、追われているんだ」

「とりもどそうとして、おっかけにきたんだよ」
申し訳なさそうな顔をしていた。
なんか、また巻き込まれたな

〜市場〜
「すいませーん、どいてください！！」
人がたくさんいたので、そんなに早く進む事が出来なかった。
「おい、待ちやがれ！」

「お前は、カイトなんでこんな所に！？」
俺の名前を読んだのは、
「おぉシルヴィアか、助けてくれ！！」
「何事だ！？」
不思議そうな顔をしていた。
よく見てみると、袖に「風紀」と縫ってあった
「急に追いかけられているんだよ」
「そうなのたすけて」
「この子って、お前。」
急に顔色が変わった。怒っているような・・・・
「なんだよ」
「風と土の力を合わせて、トネレ（雷撃）」
『ゴゴー』
横の道路の石が黒くなっていた。
「わぁ！何するんだよ」
「この誘拐犯め！！」
「えーー！！なんでーーーー！！！」
「こちら、シルヴィア。誘拐犯を見つけた。ただちに応援頼む！！」
魔法石みたいなので連絡を取っていた。
シルヴィアまで、敵にまわってしまった。
「よっし、エレナ」

担ぎ上げて、お姫様抱っこの体勢になった。
「わぁーーたのしい」
この状況楽しんでいますよ・・・・まったく

「それ!、走れーー!!」
「まてーーー!!」
「待ちやがれ!!」
「お待ちなさい!!」
「こちら!、ポイントA－15で発見」
なんか増えてないか・・・
「風紀」と書かれた刺繍の人や、黒服の人に追われながら・・・

逃げることになった。

第3話　続　平和な休日を求めて　（誘拐編）（後書き）

修正・加筆しました。

次回・・・カイトとエレナんの運命は……

第４話　続　平和な休日を求めて　（捕縛編）

～市場～
「くそったれ」
疲れたーー
人が多いため、魔法を使ってこないのがラッキーだった。
「待ちやがれ」
「まてーー」
黒服の男が数人とシルヴィアが追いかけていた。
「あっかんべーだ」
『バン、ゴゴゴ』
周りが閃光に包まれた
「まてーカイト」
後ろの道が粉々になっていた。
「やば！！」
方向を変えてみた。
「いけいけ～」
当の本人は、楽しんでいるようだが

～裏路地～
薄暗い狭い路地に俺たちは隠れた
「ハァーハァー疲れたーここまでは来ないだろう」
「だいじょうぶ？」
「大丈夫、大丈夫」
何でこんなことになっているのやら
「どうして、追われているの」
「お母さんにあいたかったから」
「お母さんって昨日一緒にいた？」
「うん、ひさしぶりにあって、たのしかったのにおしごといっちゃ

って」
悲しそうな顔をした
「そうなんだ」
「だから、あいにいこうとおもったの」
「そうか、わかった。どこにいるんだお母さんは」
親子の再開を手助けしますか
「ウルスラ庁にいる」
ウルスラ庁といえば、噴水から北東に行ったところだったかな

「お！、見つけたぞお前！！」
黒服の男が一人いた
「くそ、エレナ下がっていろ」

横に置いてあった。モップを取って
「今ここに、水と風の魔法を合わせて」
なんとなく授業で言っていることを思い出して。
「何、お前魔法使えるのか！」
ビビッていた
「お兄ちゃんすごい」
「かっこいいとこ見せてやる」

「必殺　モップとばし」
「えーーー」
「わぁおもしろい」
『バシッ』
見事に命中した。
「どうだ、さぁお母さんに会いに行くぞ」
「うん」

～ウルスラ庁に行く途中～

「秘儀！、りんご投げ」
「ぐは」

「必殺！、バナナの皮」
『ツル』
「うは～～」

「奥義！、樽落とし」
『ゴロゴロー』
「うは～～」
「ぐは」
「ま…て・・・」
『カッーン』
「ストライク」
「すごい！！、すごい！！」

そんなこんなで
～ウルスラ庁前～
「着いた」
立派な白色の建物がある
嬉しそうな顔をして
「ついた！ついた！」
だが・・・・

「そこまでだ」
門の前にシルヴィアが立っていた。
「シルヴィアどいてくれ、感動の親子の再開をしないと」
「黙れ、者ども囲え」
あっという間に囲まれた。

「もう終わりだ」
「さぁおとなしく捕まれ」
「ここまでかな」
おとなしく捕まることにした。
殴られるのは、痛いもんね。うん

捕まった。
「お兄ちゃんを離して」
こっちに来ようとしたが、男たちに阻まれていた。
「エレナ様危ないですよ」
「カイトお前は、犯罪を犯した。罪を償ってもらうぞ」
犯罪だの罪だの何言っているかサッパリだった。
「子供一人親に届けに来ただけだろ。くっそ、離せ！！」
「さぁ！、こいつをつれていけ」

俺の人生ってここでお終い！？
1か月もかかって来て
魔力0ですって言われて
そんなんで終わりなの・・・

「お待ちなさい！！」
一帯に威圧感のある声が鳴り響いた。
正門から出てきたのは
「あぁ、お母さん」
昨日一緒に歩いていた人だった。
でも、着ている服がとても豪華なドレスだ。
その人が、神様に見えた。
「娘のエレナのわがままを聞いてくださってありがとうございます」
「いえいえ、そんな」
なんだかこっちが、かしこまってしまう。

「お母さん、お兄ちゃんなんにもわるいことしてないよ」
「はい、わかりました。下がりなさい！」
「はい…しかし」
「いいから、下がりなさい」
威厳があった
「は、はい！！」

囲んでいた人たちがどっかにいった。
「ありがとうございます。私の名前は、ベアトリスこの国の女王をしております」
微笑んだ。どことなくエレナと似ていた。
「って、えーーー王女様」
神様じゃなくて王女様だった。
「はい、そうですわ。この子は、娘ですの。」
「エレナって、姫様だったんだ」

新事実発覚！！
「えっへへ、そうだよ」
「はぁーしっかしなんで、あぁすいません言葉づかい悪くて」
「いいですよ、私とエレナは、王都に住んでいて。公務のためこちらに来たため、一緒に連れてきたの」
「そうなんですか」
「でも、エレナ。今日王都に帰らないといけません」
「えっ、なんでお母さんもっとお兄ちゃんと遊びたい」
「うれしい事だけど」
男としては、うれしい言葉だね～
「わがまま言っては、いけません。えーとすいませんお名前聞いていませんでしたね」
「カイトです。エレナまた会えるさ」
「ほんとーう？」

首をかしげた。
「本当だよ」
「もう少ししたら、馬車の準備が整います。カイトさんこれで」
あることを思い出して、走った。
「どこいくのお兄ちゃん」
「少し待ってて」
ウィンクしてみた。

〜ある所〜
忘れてたよ、渡すものがあった。

〜ウルスラ庁前〜
エレナが馬車に乗っていた。
「間に合った。」
汗が出ていた。
たっく、今日どんだけ走ったことやら
「あっ、お兄ちゃん」
「はい、忘れ物、デヴェテンテに置いて行ちゃったんだ」
輪投げで取った。大きなヤギのぬいぐるみを渡した。
「あぁ、本当だ」
「また、いつでも会いに来い、待ってるから」
「うん、わかった」
「それじゃ、またこんどな」
「うん、またね」
手を振っていたエレナの笑顔は最高だった。
夕日で輝いた馬車は、とてもきれいだった。

いや〜今日は、いい日になったよ。うん。なったなった。

〜デヴェテンテ〜

疲れて、お腹がすいたので、デヴェテンテに立ち寄った。
「おぉ、大丈夫だったか」
「はい、大丈夫でしたよ」
「そうか、それはよかった」
「はい、良かったですよ」
命がいくつあっても足りないぞ
「ところで、皿を割ったり、机や椅子を破壊したから、減給だよ」
「え……えーーー！！そこは、懐の大きさを」
「そんな物ないよ、あるのは壊れた物だけだよ」
「そんな～～～」

前言撤回。やっぱよくわないわ・・・

俺に平和な休日はいつ来るのやら・・・

その後この事件は、学校中を駆け巡り
俺の知名度を上げるのに一役買った。（ある意味で）

第４話　続　平和な休日を求めて　（捕縛編）（後書き）

修正・加筆しました。

次回は・・・新たな戦いが始まる！？

第5話　食べ放題券までの道けわし

誘拐騒動の次の日
～学校・廊下～
『ザワザワ』
「あの人が、お姫様を誘拐したんだって」
「わたしは、幼いお姫様を手籠めにしたんだってきたけど」
「ウソー魔力ないくせに、やることえげつないね」
「ほんとだよね」

あぁーー、鬱になっちゃうよ俺

フィオナと会った時
「…最低」

エーデに会った時も
「あなたがそんな人だとは思いませんでしたわ」

フィーナは・・・
「まさか、ロリコンだったなんて、だからあの時助けたのね」

でも、ジェシカだけは・・・
「やっぱり、君は面白いわ」

どう、この扱い。
前までは、魔力0だったけど、今回はきついです。

「カイト。モーガン様がお呼びです」
声をかけてきたのは、前に講堂であった美人のお姉さんだ。

「わかったよ」

～校長室～

「ババアさん何かようか」

「ババアさんとは、口が悪いのは治っておらようじゃのう」

「いや、ババアからババアさんに変化した」

「アホか」

「生徒に向かってアホないだろ」

「まぁ、そんなことはいい」

「無視ですか・・・」

「お前は、女をはべらす趣味でも、あるのか」

「女って、はべらしてもないよ」

「お前が出会った四人のおなご達の魔力データみてみるがいい」

「なんだよ急に」

書類が渡された。

ーエルフリーデー

火：1．水：1．風：1．土：5

ーフィオナー

火：1．水：5．風：1．土：1

ーフィーナー

火：1．水：1．風：5．土：1

ージェシカー

火：5．水：1．風：1．土：1

4人の名前が書いてあった。

「ババア何で俺があったことを知っているんだ」

「そんなことはどうでもいい、これを見て何か思わんか」
「1ばっかじゃないか」
「やはり、馬鹿は、バカじゃのう」
「うっせーバカバカいうな」
「この4人とも、能力が偏っているんじゃよ」
「あぁ確かに、1と5しかないもんな」
「5がどれぐらいすごいのか、お前さんわかっておらんようじゃの」
「で、どれくらいなんだ」
「世界に数百人しかいないんじゃぞ」
「世界に数百人もいればましじゃん」
「あほか、うつけ者！！」
「うつけ者でも、つけ者でもないわー」
「はぁー…久しぶりに叫びすぎたわい」
「そのまま、逝っちまえ！」
「口数の減らんガキじゃの」
「用事はすんだか」
「もう、すんだわ。とっとと出てけ！！」
「言われなくても出ていくわ！」

毎回むかつくこと言ってくるよな、あのババア。
しっかし、あの4人そんな力があるなんてな。
実技は、さぼってたし仕方ないか

時かわって
～学校・レストラン（お昼休み）～
「あぁ～ひもじい」
昼ごはんは、パンだけ

～注文する時～
「パンください」

「メインは、何にしますか」
「パンで」
「えっ…」
「パンだけでいいですから」
「…はい、かしこまりました」

「パンお持ちしました。ごゆっくりどうぞ」
・
・
・
・
泣けてくるぜー
お金がないのは、憎い
今週、給料が少なくなってしまった。
「朝と、昼パンのみ」
こんな日が、二週間続くの最悪だー

「カイトじゃないか、またあったね」
ジェシカがいた。
「よっ、ジェシカ」
「君の食事は、パンだけかい」
「そうなんだよ、昨日のせいで」
「それは、災難だったね、風紀委員にも追われてたんでしょ」
「風紀委員？確かに風紀って刺繍つけた人たちには、追われたけど」
「その人たちよ」
「シルヴィアもいたような」
「シルヴィアも風紀委員所属よ」
「へぇーそうなんだ」
新しい情報を入手。
「では、用事があるのでこのへんで、またねカイト」

「あぁありがとさん。ジェシカ」

〜学校・魔法実習場（午後）〜

学年合同実習だった。

〜その終了間際〜

「モーガン様からお話があります」

「ふむ、明日から学年総当たりトーナメントを開催する。」

『ウォー』

『ザワザワ』

『ガヤガヤ』

「盛り上がってるなー」

「ルールは簡単。相手が「降参」と言うまで、戦う事じゃ」

「えっ…魔法使えないんですけど」

「なお、優勝者には、特別賞として勲章を授けよう」

「勲章なんていーらね」

「準優勝者には、1週間レストラン食べ放題券を進呈する」

「なに！！！！」

食べ放題、食べ放題。食には勝てないね

これで、今後の金銭面の問題が解決する！！

「よっし、やってやるぜ！！」

「では、明日の朝一でくじで決める。解散」

〜デヴェテンテ（夜）〜

「フィオナ頑張ろうな」

「なんで、そんなに気合入っているの」

「そりゃ、食べ放題だぞ食べ放題」

「あぁ、準優勝の」

「そうそう」

「頑張ってね」
「あぁ、頑張ってやるぜー」

そして、翌朝
～学校・魔法実習場（朝）～
「それでは、くじを引いてください」
「俺は、Ｃ－１４っと。対戦相手は・・・」
「私よ」
「えっ…フィーナか」
「あなたなんで、魔法がないのに出たの」
「そりゃあ、誰にも譲れないものがある」
食だ～～～～～
「そう、お互い頑張りましょう」
「おう」

「試合開始！」
いろいろなところで、試合が始まった。。
「俺は、３番目っと」

あっというまに、出番が来た。

「フィーナ対カイトの試合を開始します」

フィーナ
火：１．水：１．風：５．土：１

カイト
火：０．水：０．風：０．土：０

俺の食べ放題券をかけた戦いは、始まった。

第5話　食べ放題券までの道けわし（後書き）

修正・加筆しました。

書いていると、「食」ネタが多いです。地盤が固まるまで、食ネタが続くと思うので、あしからず。

次回は、ようやく、バトル、バトル！！、バトル！？

第6話　食べ放題券争奪戦！？　（フィーナ編）

～魔法実習室～
「フィーナ対カイトの試合を開始します」

フィーナ
火：1．水：1．風：5．土：1

カイト
火：0．水：0．風：0．土：0

「フィーナ準備はいいか」
「そちらこそ大丈夫なんですか」
「いろいろと仕込んできたからな！」
「勝つ気満々ですね」
「あぁ」
ひえぇーこえー。バアさんに強いと言われているからな。
「いきますよ」
「攻撃宣言ありがとうな」
確か、フィーナは風が一番高かったな

フィーナが動き出した。
「風の力をここに、フロートベント《突風》」
「うわっ」
とっさに右によけた。
『ドッン』
「あっぶね」
あんなのくらったらつぶされるな

「威力はんぱないな」
「まだまだ、ベントベレー《風弾》」
弾みたいなのが、飛んできた。
『ビュン、ビュン』
くらったらハチの巣になりそう
これもまた、強いな
「いやー強いねー」
「なんでそんなに余裕なの」
「俺は、強いからな」
嘘も戦略のうちってね
見かけによらず強い。
やっぱり外見で判断しちゃだめだね
「本当の力出しなさい」
「わかりましたよっと」

やられっぱなしもかっこ悪いからな
反撃開始といきますか
「ダーツいっけーーー」
両手から、４本のダーツを投げた
『ビューン』
「ベントボンクレア《風盾》」
『カーン』
ダーツが飛んで行った。
反撃失敗

「子供だましだね。カイトさん」
「ダーツの腕に自信があったんだけどね」
「風の前には無意味ね」
「やってみなきゃわかんないぜ」
「ダンスデュベント《風舞》」

風の球が浮いていてこっちに一斉に来た。
さっきよりも、速い
『ビュン、ドン、バン』
やばいよけきれない
「いたっ」
足をけがしたみたいだ
でも、骨折はしていないようだ

足がふらついた。
「うわ」
「スキあり。ダンスデュベント《風舞》」
『ビュン、ドン、バン』
先ほどと同じ技だった。
よけきれない
「えっーー」
やば、俺逝ったかな。

『ドカン』
「ぐは、…げほげほ」
やば、結構くらったな
一瞬三途の川が見えたよ。まったく
「降参しないの」
「まだしねーよ。それにフィーナも疲れてきていないか」
フィーナは肩で呼吸していた。
「そんなこと、ないわ…よ。ベントベレー《突風》」
『ヒュン、ドン』
「はぁーはぁー。ごほん、ごほん」
まったく、初戦からこんなに苦戦していいのやら。
「まったく、筋肉痛決定だ」
こんな、防戦ばっかでかっこ悪いな

「意外に逃げ足は、速いですね」
「それほどでも」
「まだ戦うの。とっとと、降参しなさい」
「まだまだー」
懐に入り込んだ。
「フロートベント《突風》」
「ぐはぁ」
手に触ったのだが、吹っ飛ばされてしまった。
その時、体に何かが駆け巡った。
「痛いな！」
ついに体までおかしくなったか

「最終秘密兵器いくぜ」
「させません。ベントベレー《風弾》」
少しかすったが、
なんとかよけて
「いっくぜー。ビー玉大量まき」
『ザラザラ』
「えっビー玉って」
『ツル』
「きゃ！！」
すべって、バランスを崩した。
「チャンス」
懐から、果物ナイフを取り出して
デヴェテンテから、拝借したんだけどね

「とっどけー」
あと一歩だった。
届かなかった。

「あと一歩なのに」

その時、体が軽くなった。
「ラッキー、とどいた」
そのまま押さえつけて
首に果物ナイフを当てた。
「降参です」
「勝者カイト」

体が軽くなったのは、フィーナの魔法でもあったたのかな
「まぁいっか」

フィーナがこちらに歩いて来ていた。
「いい試合だったよ」
「こっちだって」
「まさか、ビー玉だなんて思いつかなかった！」
「どうだ、俺の奇策は」
「魔法が使えなくて…お金がないことがわかった。」
「痛いことを」
「でも、おめでとう。次も頑張ってね」
「準優勝目指して頑張るぞ」

トーナメント初日は、終わった。

フィオナも勝ったということで、祝勝会を開いた。
～デヴェテンテ（夜）～
「フィオナとカイトの勝利を祝して乾杯」
「明日試合があるんですけど」
「まぁ気にしないしない」
「そうですか」

「そうだよ」
「フィオナがいうなら、ていうか何で2人ともいるんだ」
「ジェシカに呼ばれて」
そこには、フィーナがいた。
「まぁ、気にしなさるな」
ジェシカ言うなら

「それでジェシカは勝ったのか」
「それは」
困った顔をした。
「開始一秒で降参したの」
フィオナが事実を言った。
「フィオナ余計なことを」
「別に言ってもいいじゃない」
「それよりも、どうやって、勝ったんだフィーナに」
ジェシカが話題をそらした。

フィオナが渋々ながら
「ビー玉よ」
ジェシカが、腹を抱えて笑っていた。
フィオナが、くすくすと笑っていた。
「ビー玉か、こりゃ傑作だな」
「その後に果物ナイフで」
「あぁそのことはいっちゃ…」
時すでに遅く
「そういえば、果物ナイフがなくなっているんだが、カイトしらないか」
『ギクリ』
「何言っているだ。おばさん」
「このナイフ、家のだ」

フィオナがいつの間にか、ナイフを持っていた。
「フィオナいつの間に」
「カイト、また減給だね」
「そんな～」
「そのナイフ高かったんだから」
わざわざ高いナイフを選んだのか俺
余計頑張らないとまってろ食べ放題券

「そんな～」
「頑張れよカイト！！」
「頑張って…カイト」
「頑張ってねカイト！」
3人に憐みの目で見られた。

おばさんが空気を読んで
「みんな、食べて飲んで。さぁさぁ！！」
「よっし、盛り上げるぞ」
「わかった」
「はい」
「うん」

そんなわけで、賑やかな夜が去って行った。

明日の試合大丈夫かな・・・

第6話　食べ放題券争奪戦！？　（フィーナ編）（後書き）

修正・加筆しました

呪文は、フランス語、ドイツ語の単語を使用しています。

バトルにようやく入りましたが、主人公の武器があれでいいのか少し迷いました。

主人公の面白い武器を募集しています。武器と使用方法など書いてください。

魔法の種類も募集しております。

次回は、バトル！？　バトル？？　いったい何の武器がでてくるのやら・・・・

第7話　食べ放題券争奪戦！？　（フィオナ編）

翌朝
～魔法実習室（朝）～
一つの剣を腰に掛けて今日を望んだ。
昨日忘れてたんだよね……
「レッグ対カイトの試合を開始します。」
レッグ
火：3．水：1．風：2．土：1
カイト
火：0．水：0．風：0．土：0
しらない男だった。まぁメガネをかけていて、いかにも真面目そうだった。
「お前みたいな魔力0に負けるはずがない！！」
余裕そうな顔をしていた。
「勝手に言ってろ」
飛び出した。
右ナックル
「ふん、甘い」
鼻で笑った
「まだまだ」
「こっちも行かせてもらうぞ。水と火の力を合わせて、迷いに落とせ」
霧みたいなのが出てきた。

「ヴァイソン《幻影》」
周りに男が増えた。
「なにーーーー！」
「消え去れ」
『バシ、ゴン、ガツ』
ひたすら殴られた。
「ぐは、ゲホ」
「まだまだーーー」
「そうとう、Ｓみたいだな…はぁーはぁー」
「もっと悲鳴を上げろ」
何とか立ち直った。
「うっせいな、お前の弱点はこれだ」
ビンに入った油を取り出し周りにまいた。
そしてマッチをつけて
『ボッオオ』
火をつけた
霧がなくなって行った。
「なに！？」
「見つけたぜ」
近づいていき
「ここだーーーー」
股間をおもいっきし蹴った。
『キーン』
「あがっ、うがっ。ううう」
股をおさえながら悶絶していた。
「はやく、降参と言え」
「誰が…お前…なんかに…」
「おらおら、はやくはやく」
さらに股間に蹴った。
「わかった。降参だ。やめてくれ」

「早く言えばいいのに」

「勝者カイト」

次の戦いは・・・

「自家製煙幕そして、果物ナイフ」

「きゃー・・・・参りました」

知らない女の子に勝った。

そして・・・

～魔法実習室（昼過ぎ）～

「フィオナ対カイトの試合を開始します。」

フィオナ

火：1．水：5．風：1．土：1

カイト

火：0．水：0．風：0．土：0

袋を後ろに置いた。

「まさか、戦うなんてね」

「あぁそうだな」

「手加減はしない」

「少しぐらい手加減してくれないか」

「いや」

フィオナが動き出した。

「ワセラクゲル（水弾）」

「いきなり、容赦ないな」

水の弾だ。よけれた。

「これが普通」

「こっちは、素手だけなのに」
水風船を出した。
「ウソはだめ。ワセラクゲル（水弾）」
『パーン』
はじけて中から赤色の水が出てきた。
「くそ、せっかく仕込んだのに」
「甘いよカイト。ワセラネデル（水針）」
無数の針が飛んできた。
「くそっ」
かすり傷程度で済んだが、結構な数をくらった。
足が痛くなってきた。
「もう一回ワセラネデル（水針）」
後ろにおいてあった袋を取った。
「小麦粉シールド」
『バサッ』
小麦粉が空中に舞った。
「今だ、マッチで粉塵爆発」
『ドカッン！！』

「げほげほ。こっちまで、ダメージくらったよ」
爆風の威力が想像以上にすごかった。
「もう終わりなの」
ファオナの周りに水の障壁が出来ていた。
「魔法は、強すぎるだろいくらなんでも」
「これで終わりワセラクゲル（水弾）」
水の弾を出してきた。
「まだまだーアルミばら撒き」
小さいアルミの板が目の前に出された。
「そして、またマーッチ」
アルミが火と反応して、強い光を放った。

「えっ！」
ふらついた。
「届けー！！」
果物ナイフは、空を切った。
フィオナは、水の力を使って高く飛んでいた。
でも、足をつかんだ
「離してワセラネデル（水針）」
いくつか当たってしまった。
その時、体に何かが駆け巡った。
「痛い…な！」
「触れただけすごいよ」
「まだだよ。こっちも必殺　投げ銭！！」
頼むこけてくれ！！
銅貨が宙に舞った。
「これやると心が痛くなる」
「簡単によけれ…え」
『ツル』
気づかないうちにフィオナの下に水たまりができていた。
倒れかけていた
「チャンス！！」
馬乗りになって、果物ナイフを首に当てた。
「…降参」
「勝者カイト」

「ふぅー勝った」
「はやくどいてくれるかな」
「あぁすまん」
フィオナの顔が赤くなっていた。
「なんで、赤くなっているんだ。どっか怪我でもしたか」
「「……っ！なんでもない」

『プイ』
後ろ向きになって走り去っていった。
「大丈夫かな～フィオナ」

～テヴェテンテ～
「なぁフィオナ。本当に大丈夫か～」
「大丈夫。気にしないで」
と言いつつも、距離を取っていた。
「まったく女心がわかってないねー」
「何を言ってんですか、おばさん！」
「それよりもフィオナに勝ったんだって」
「はい、あの時はたまたま水たまりができていたので運が良かったんです」
「わたし、あんな所で魔法使ったおぼえないんだけど」
「まぁいいじゃん。運も実力の内ってね」
「わかった」
「今日は、祝勝会やらなくていいのか」
「はい、金がないんですよ・・・」
そうなんだよね～
何せ勝つためには、道具がいるから当然金が要る。
魔法がどれだけいいのかわかるよ。

低コストだよね魔法は・・・

「明日勝ったらやってください」
「よしわかったよ」
「明日、準決勝だね」
「そうなんだよ」
「頑張ってね」
「頑張りなよ」

「はい、もちろん」
そうして働いて帰って寝た。

～魔法実習室（朝）～
周りにたくさんのギャラリーがいた。
『ザワザワ』
「なんで魔力ないのに勝っているんだいるんだ」
「ズルでもしてるんじゃない」
「たまたま弱い人と当たっているだけだよ」

聞こえないぞ聞こえない。な～んにも聞こえない

対戦相手は・・・
「私よ、この前の件で借りがあるから覚悟しなさい」
「シルヴィアか」
この前ってエレナを救った時か
「ほどほどにしてくれ」
「全力でいかせてもらうわ」
「うわーおなげない」
「ついでにその口もしゃべれなくしてあげる」

げっ！！死亡フラグが立っているよね。この状況
前回使わなかった秘密兵器を持ってきている。

それは…この母さんの形見の剣・・・・・
剣の装飾は、何もなく。変哲な剣だった。

「それでは、準決勝シルヴィア対カイトの試合を開始します」

決勝までの最後の戦い。勝ってやるぜ～～～

第7話　食べ放題券争奪戦！？　（フィオナ編）（後書き）

主人公の面白い武器を募集しています。武器と使用方法など書いてください。
魔法の種類も募集しております。
こんな人物でてほしいと言うのも募集しています。

次回は、カイトは、死亡フラグを取り去れるのか・・・？

第8話　食べ放題券争奪戦！？（シルヴィア編）

「それでは、準決勝シルヴィア対カイトの試合を開始します」

シルヴィア
火：3．水：3．風：3．土：3

カイト
火：0．水：0．風：0．土：0

開始と同時にシルヴィアが動いた。
「水と風を合わせて、エイスクゲル（氷弾）！」
先がとがった氷がこっちに来た。
右によけようとしたが、
「トネレ（雷撃）」
先に雷撃を放っていた。

氷か、雷撃どっちか受けるのを考えた結果・・・

『ビリビリ』
「痛い…な」
全身がマヒしているようだった。
「うごけないようですね、それでは、フラーメ（火炎）」
今度は、炎が来た。
寝返りをして何とかよけた。
でも周りは熱い
「熱いな」
「もう、終わりですの」
「こっちは、閃光玉」

周りは一気に明るくなった。
「バンガマレ（城壁）」
目の間には、土の壁が出来ていた。
「水と土を合わせて、マーラクバウム（木刺）」
『バーン』
木がこっちに迫ってきた。
よけたが、不利なのは、変わらない。
「まだまだいきますわよ！、エイスクゲル（氷弾）」
「くっそー」
左手にかすって、血が出ていた。
左手に熱があった。
距離は、だいたい１０ｍ位。
シルヴィアが余裕な顔をしていた。
「魔法が使えないのはこまったものですね」
「いや、俺が特別なんだ」
この世界には、必ず魔法は誰でもっている。ただその数値が１だったりして使えない人がたくさんいる。
「特別って、随分自分を持ち上げますわね」
「お前だって」

「遠距離魔法は、よけられてしまいますので、これでエイススチェウェト（氷剣）、ドナアスチェウェスト（雷剣）」
蒼白の細い剣と、紫色の細い剣が握られていた。
「そっちが剣なら、こっちも」
秘密兵器の剣を手に取った。
「最初から使えばよかったのに」
「ここまでやるとは思わなくてな」
「こっちから」
二刀流は、だてではなく
『カキン』

「くぅ」
「まだまだ」
『ザク』
「ぐはっ！！」
左腕をかすった。
それだけでも、電気が流れた。
一つの剣を防ぐともう一つの剣が来る。
タイミングが取りにくい
2本の剣が一挙に来た。
『カキン！！！』
「重い」
「まだまだ、初心者だ…な！」
「うせっ！、言ってろ」
その通りなんだが、まったくもって初心者。昔チャンバラごっこをしたことがあるだけだ。
『ブン』
『ブン』
『キンッ』
防戦一方で、まともに攻撃させてくれない。

……。

……。

その後何回剣を受けたか覚えてない。
剣と魔法の両方はきつい
体はぼろぼろで熱くなっていた。
だが、骨折はしていない。
「はぁ…はぁ……」
「降参しないの？、こんなんになって」

「倒れるまでは、降参しない！」
「それでは、まだいきましょうか。」
体がほとんど動かなかった。でも、たまたま上にあげたら
『『カーン』』
2本の剣が宙に舞っていた。
「私の軌道がよまれた」
はっきり言って、偶然です。
「剣がなくても、トネレ（雷撃）」
動けなかった。
咄嗟に剣で防いだ。
剣で切れるはずがないのにね
『ドッカーン』
周りに煙がすごかった。
「勝った……え！！」
俺の両隣は、黒く焦げていた。
体は、痛かったがそこまでだった。
「カイト、お前…何をした！？」
「剣で切ったかな！？」

観衆がうるさくなった。
「魔法を切る剣なんて聞いたことない！どういうことだカイト！！」
「俺だってしらないよ」
そう俺がこれをもらったのは・・・

～俺の村（出発前日）～
「村長なんですか」
「お前にこれをやろうと思ってな」
一つの剣を渡された。

「何ですかこれ」
「お前の母親の形見だ」
「えっ！！母さんの…」
俺の母さんは、生まれて2，3年後に死んでいる。
黒髪が長くてきれいだったのは、覚えている。
「あぁそうじゃ、病死で死ぬときに・・・「もし、カイトがここから旅立つときが来たらこの剣を渡してください」と言われている」
「これが母さんの……。」
「あぁそうだ」
何の変哲のない剣だが愛着が持てた。
「ありがとう、村長」
「気にすることはないわい。ほっほっほっ」

「母さんの形見……」
「まぐれですわフラーメ（火炎）」
2つに裂けた。
「これなら、マーラクバウム（木刺）」
『ガシ』
「いたっ！」
切り裂けれなかった。
さっきなんで二つに分ける事が出来たのか謎だ。
「やっぱり、さっきのは…まぐれね！」
「あぁ……そう…かも！？」

やばい、完全にこの剣を頼ってた
唾をのんだ
「エイスクゲル（氷弾）」
剣で防ごうとした。

『グサッ』
「……え」
自分のお腹あたりに刺さっていた。
「わーーーーーーーー！！！！！痛い痛い」
「大丈夫か！？」
「もうだめかも……」
『カクッ』
「おい！！」
足音が聞こえた・・・

「あれ……痛くないかも…」
起き上がれた
「お…お前、幽霊か！！？？」
シルヴィアの顔が青白くなっていた。

「体は痛いところないよな…うん」
戦闘での痛みが残るだけで、お腹は痛くない。
「試に」
左手に向かって思いっきり切ってみた。
『ザクリ』

「「「「「「「「きゃーーーーー！！！」」」」」」」」
観客の女子が一斉に悲鳴を上げた。

「お前ついに頭がおかしくなったか」
シルヴィアが先ほどと同じ顔をしてた

「切れないよな～」
何度も切ってみる
『スパスパ』
「やめて、見ているこっちが変になる」
「わかった。わかった」
この剣の決まりがわかった
「これで、終わりにましょう。マーラクバウム（木刺）」
避けたが、左足をかすった。
そこから、血が流れ出した。
「まだ倒れないとは・・・エイスクゲル（氷弾）」
避けた。
「まだまだ、チャンスは一回」
「何ぶつぶついってますか」
「気にすん…な」
一気に距離を詰めた。
「自分からあたりに来るとは、これでトネレ（雷撃）！！」
「勝った！！」
目の前に来た雷撃は、切れた。
剣を捨てて、果物ナイフを取った。
「終わった」
「え……私が…負けた……」
「はやく、降参と言って」
「降参します」

『ザワザワ』
「おい、勝っちまったぞ」
「シルヴィアさんが負けるなんて」
「おいおいこれからどうなるんだ」

いろいろな声が聞こえた。その場で腰を下ろした。

「はぁ～～～～～疲れたーー」
「さっきの剣は何なんだ？」
「あぁーあれは」
答えは一つ
「切れないものを切って、切れるものが切れない剣」
「きれないものを切って…切れるものが切れない剣！？」
「たぶんそうだ」
「今回は、それがあったから勝ったんだ次は勝てると思うな！！」
悔しそうな顔をしていた。
「はいはい」

そうして、準決勝は終わった。

「フィオナ悪いが、今日は休むは」
「わかった。お休み」

今日の夜は一日中寝ていた。

～次の日～

「決勝戦　カイト対エルフリーデの試合を始めます」

第8話　食べ放題券争奪戦！？（シルヴィア編）（後書き）

前回の話の「切れないものを切って、切れるものが切れない剣」の名前を募集しています。

主人公の面白い武器を募集しています。武器と使用方法など書いてください。

魔法の種類も募集しております。

こんな人物でてほしいと言うのも募集しています。

第9話　食べ放題券争奪戦！？（決勝戦とその後のひと騒動）

「決勝戦　エルフリーデ対カイトの試合を始めます」

エルフリーデ
火：1．水：1．風：1．土：5

カイト
火：0．水：0．風：0．土：0

「お前、凄いな決勝まできたんだ」
「私の実力を思い知りましたか！！」

『コソコソ』
「たまたま、実力者が偏って決勝まで行けたのにね」
「そうだね、能力の高い人は固まってからね～」

「そこ！！聞こえてます！」
「な～んだ、運が良かったんだな」
「何を～」
床を何回も蹴っていた。
「カイト早く降参したほうが身のためですのよ」
「あぁそうだな。降参！！」
「…え……」
「審判さん早く～降参しました～」

「…あ、勝者エルフリーデ」
「よかったな、エーデ」
「な…なな……なんですのこれは！！」

「そのまんまなんだけど降参て言われたから降参したんだが・・・！？」
「なんで、当然のことをしたみたいな顔をしているんですの？」
床を蹴った。

「もう、終わったのかつまらんのう」
「モ、モーガン様」
「もうちょっと楽しませてくれると思っておったのに」
「そりゃバアさんが、準優勝を食べ放題券にしたからだろ」
「フォフォフォ、まあよい授賞式でも、始めてくれ」
「は…はい分かりました」
美人のメガネをかけたお姉さんが言った。
「エーデあの人誰だっけ？」
「はぁー！？魔法学教えている。フローラ先生よ、毎回あってるでしょ」
「たぶん！？」
あんな先生いたかな～～？？
「では、表彰式を始めます」
みんなが適当に集まって来た。
「それでは、準優勝カイト」
「いえぇーーーーい！！」
叫んだ
『シーーーン』

「え…と反応なし！？」
『シーーン』

「はいわかりました。もういいです。シクシク」
「ごほっん、続いて優勝者エルフリーデ」
咳で片づけられた！！

「優勝者には、この勲章を」
なんか小さい変な勲章だった
「ありがとうございます」
「準優勝者にはこれを」
「ありがとう……何これ！？」
渡されたのは、１枚の変哲もない紙に『食べ放題券』と書かれてあっただけだった。

「おい、ババアこれはどういうことだ！」
「食べ放題券じゃよ」
「これのどこがだよ！！」
「紙に食べ放題券とかかれてるじゃろ」
「詐欺か！いい根性してんな！このクソババア！！」
「ふぉふぉふぉー何とでもいいうがよい」
「クソババア！やっぱり一回逝っとけ！」
「じゃかしいわい！」
「カイト！！モーガン様に向かってババアとはなんですか！ババアとは！」
「あんたこそ二回もババアと叫んでいるじゃないか」
「いや…これは…ですね……」
フローラが慌てていた。
「フローラ気にすることのない。このバカにかまってると本当に馬鹿が移るぞい」
「何だとこのクソババア！！」
「皆が、困っておるからこのへんでお開きじゃ。ほれ解散」
ババアさんが奥に行ってしまった。それについて、フローラも・・・・
だからなし崩し的に授賞式は終わった・・・・
「結局！どうなるのこれ！！」
食べ放題券を上に掲げてみた。
「誰も反応してくれない……」

『ヒューーー』

～デヴェテンテ～
「カイトの準優勝とエーデちゃんの優勝を祝して乾杯！！」
「「「「「「乾杯！！」」」」」」
「てか何でエーデがいるんだ」
「私が連れてきたんだよ」
「ジェシカまた余計なことを…」
「大人数な方が楽しいじゃないか」
「まぁそうなんだが」
集まったメンバーは、フィオナ、ジェシカ、エーデ、フィーナの四人だった。
「でも、おばさんいいんですか？店を貸切にして」
「大丈夫、大丈夫こんな時ぐらいお祝いしないと！」
「わかりました。」

『カランカラン』
「今日は店じまいしているよ…ってどうしたんだみんな」
たくさんの人が手に何かを持ってきていた。
「いやーめでたいことがあったって聞いたもんで駆け付けたのさ」
「チーズ屋のおじさんに、酒屋のおじさんそれに野菜屋さんに肉屋さんにみんな来たんだ！」
「フィオナ誰なんだ？」
「この店の仕入れ先の人達」
「なるほど」
次々と土産が来て、宴会となった。
酒くめ。食事持って来い
なーんか似たことあったよな前に・・・

「いやな予感がする……」

……。

……。

……。

「ちょっとカイト聞いてよ～」

「カイトさん私の話を聞いて～」

「カイトこっち見て」

「カイトー今日の試合はみとめませーーーんですの」

真っ赤になって出来上がってた４人が目の前にいちゃったりする。

周りの大人は、酔っていて楽しんでいた。

予感的中

「カイトさんこのブドウジュースおいしいですね」

「カイト…ブドウジュース飲む！？」

「お前ら酒臭いし…あぁジュースじゃないから飲むなって」

「プハーーー飲まなきゃやってられないでしょ」

「じじいみたいなことというなよジェシカ」

「君がやさしくしてくれないからでしょ」

近づいて来た。顔が火照っていてとっても可愛かった…

「こんなこと考えちゃだめだ」

「何考えてたの～？？う～んお姉さんにいって見なさい」

さらに近づいて来て心臓が高鳴った。

「いや…近づかないで…」

突然

「何で…う…うぅぅ」

口を手で押さえた。

「まさか！」

「やばい…もう…だめ……」
「ジェシカさん早くこっちです」
……。
……。
「はぁーーー疲れた」
何があったかは・・・思い出したくない……
「外の空気でも吸いに行くか」

『カランカラン』
外を出てみたら、フィーナがいた。
「おう、大丈夫か！？」
「カイトさんか…だいぶんよくなった」
フィーナが上を向いていたので見てみると
「きれいだな」
空に点で描かれたきれいな絵があった。
「点と点で結んで線となる。そしてそれが一つが絵となりお話ができる。凄いと思わない？カイトさん」
「あぁそうだな」
フィーナは、空を見上げていた。
今日の夜空は、俺たちを祝福しているように見えた・・・・・

その後・・・
「うぁぁーエーデ落ち着け！！それにジェシカも何やってるんだ！

！フィオナは不思議なポーズするな！！フィーナはまた飲むな！！」

まだ・・・俺の夜は長かった・・・

「とほほ～」

第9話　食べ放題券争奪戦！？（決勝戦とその後のひと騒動）（後書き）

前回の話の「切れないものを切って、切れるものが切れない剣」の名前を募集しています。

主人公の面白い武器を募集しています。武器と使用方法など書いてください。

魔法の種類も募集しております。

こんな人物でてほしいと言うのも募集しています。

第１０話　フローラ先生のお説教

～学校・廊下～
「ふわ～～～～寝み」
今日の鏡を見たときの姿はひどかった・・・
そりゃ昨日あんだけ騒げば寝れなくもなる。
飲みつぶれた４人を介抱(かいほう)していたんだから

「眠たそうですね」
授賞式で表彰していたフローラ先生が声をかけてきた
「おはようございます～フローラ先生！」
「どうしたんですか！？」
「昨日祝勝会をしてそのまま、潰れてしまったんですよ」
「お酒とか飲んでないですよね！！」
「いや、俺は飲んでないです」
「それならいいです。そんなことより早くいかないと授業に遅れますよ」
「そうですか……」
どうでもいいけどね。
「呑気なことといわずにはやく」
「は～い」
「言っておきますけど私より遅れたら遅刻ですよ！」
「え……」
「最初は、私の授業ですから」
「そう…なんですか！？」
「そうです！！早くしなさい」
「は…はい」
先生より前を歩くことにした。
その時雰囲気が一変し、

「私の言っていることがわからないのかな！？カ・イ・ト」
「は、はい。了解！！」
「よろしい」
普通に戻ったのかな！？
駆け足で教室に入る
「それでは、授業を始めますね」
昨日と一緒。
授業受けてないから普通を知らないんだけどね
「今日は、魔法の組み合わせの総復習をします。」
「やばい…眠い……」
「土と火を合…ると…鉄……った」
「お休み」

……。

……。

……。

「カイト起きなさい！カイト！」
「ふわぁ」
目がかすんだ
目の前には・・・
「うわぁフローラ先生！！」
「やっと起きましたかカイト」
「は…はい」
「今まで見逃していましたが今日からそうわいきません」
「えーとなん…でですか？？」
「昨日のモーガン様に対する態度が気に入りません」
「え…と……」

そういえば、昨日怒ってたよな！？
「罰を言うので昼に職員室まで来なさい」
「えーー！」
理不尽な！！

そして、早くも昼休みに・・・
～学校・教室（昼休み）～
「頑張ってカイト」
「あぁってフィオナは何でそんなに元気なんだ！？」
「昨日少し経ってから記憶がなくってそれで起きたら朝だった」
「そりゃよかったな」
俺の苦労も知らず・・・
「それより早くいかないと」
「おぉそうだ」

～学校・職員室～
「こんにちは～フローラ先生見えますか」
「はい。こっちこっち」
「罰ってなんですか？？」
「あなたがモーガン様をババア呼ぶのが気になって答えてください」
「いや～推薦で呼び出したのに、手違いは起きるわいろいろと大変で」
「そんな言い訳聞きたいわけではありません！！」
「いや～本当なんですけど……」
「わかりました。あなたは、いかにモーガン様が偉大なのかわかってないんですね！！」
「あの～」
「わかりました。モーガン様は、魔力が高くて以前は全てが５だったんですから」
「あの～勝手に話されても……」

「闇魔術の使い手で、近衛騎士団の騎士団長までしていた方なんですから」
「へ～～～」
もう、諦める
「近衛騎士団というのはですね。聞いてますかカイト」
「はいはい聞いてます」
「王国で一番強いんですからね。その中でも騎士団長はトップなんですからね・・・・・・・」
……。
……。
「昼休み終わったんですけど・・・」
「まだまだ逸話が残っているんです！」
「あぁ～～～～もーーう」
「それでですね、有名なのは姫誘拐事件です」
「げっそり……」
「ちょっと！聞いているんですか？」
「ひっ！すいません！」
その後も話が続く
……。
……。
……。
「と言う事なんです。わかりましたか」
「ううっ…わかりました！」

もう授業が終わってしまった
「あぁこんな時間それじゃあカイト君また明日」
「は…い。また明日」

～学校・廊下～
「はぁ～～～～」
「やあ、カイト！」
「おぉジェシカか」
「どうしたんだい！？」
驚くジェシカの顔があった。まぁ俺の顔はひどくなっていると思うが、
「フローラ先生にモーガンのババアのいい所を散々聞かされてた」
「なるほど～お気の毒にフローラ先生はモーガン様をこよなく愛しているから」
「えっ！同性愛！？」
「いや、違うみたい。あくまで尊敬の対象でそれが行き過ぎたみたい」
「なんじゃそりゃ！？」
「学校内じゃあ有名だよ」
「そうなんだ～～～！！」

新事実発覚！？

そんなフローラ先生の事を知れた一日だった。

第１０話　フローラ先生のお説教（後書き）

これから、日常編が続きます。

第１１話　食べ放題券の意外な使い道

～学校・レストラン（昼時）～
「よしっ、この食べ放題券を使ってみよう！」
昨日はフローラ先生の話でお昼食べさせてもらえなかったし…
「あの～すいません」
「はい」
「この券使えますよ…ね？」
「これは……はい使えますよ、少し待ってください」
「えっ…注文…」
注文も聞かずに行っちゃった。
「何が来るのかな～」
楽しみ～

……。

「はい、パン二つお持ちしました」
「えっ…とパン二つ！？」
「モーガン様からこの券はパン二つまでいいとおしゃっていました」
「なに！あのくそババア！」
「それでは、ごゆっくり～」
小走りで行ってしまった。
「せっかく頑張って…パン二つかよ…」
俺の努力は、何のやら・・・
「あら、カイトこんなところで何してますの？」
「エーデか…パンを食っているんだよ」
「あら、さみしいですわね」

上から目線の口調をしてきた。
「仕方ないだろ金がないんだから」
「それはさみしいことですねー」
「何か恵んでくれよ～～」
「仕方がないですから恵んで差し上げましょう」
「本当か！？やった～～～」

……。

「パンかよ…」
「あら、パンがお好きではなかったのですか」
「好き好(このん)んで食べているわけじゃない！！」
「そうでしたか？それはごめんなさい」
「それより、お金は大丈夫なんか？」
「私を誰だと思ってますのエルフリーデ・アーガイル。アーガイル家というのは名門貴族ですわ」
「へーーーアーガイルっていうんだ」
「知りませんでしたの！？」
「聞いてないしな」
「しかと覚えといてください」
「はいはい」
「カイトは何で貧乏なの？」
「貧乏はお金がないからだよ」
「そうじゃなくて、ここの学校はある程度の魔法かある程度の家名がないと入れないの」
「そうなのか！？だから、ここら辺の奴らは、ものの考え方がちがうのか」
「だから、何で貧乏で魔力がないカイトがここにいるのか不思議なのです」
「散々ないわれようだな…、しかしなんでだろうな？」

「その中でも、前の大会で準優勝できたのはすごいと思いますわ」
「そりゃどうも」
「けど…私との決着がついていませんわ」
「仕方ないだろ、食べ放題がかかってたんだから」
「食べ放題の結果がこれですか？？？？」
「皮肉を言うんじゃない！」
「皮肉なんて言ってませんわ。事実を言ったまでです。」
「それじゃあ、今日の夜ご飯おごってくれよ」
「全然つながりがありません」
「そんな～名門貴族なんだろ！？」
「そうですけど……」
「なっ！頼むって」
「そんなに頼まれては、仕方ありません。放課後私のところに来なさい」
「お、おごってくれるのか！？」
「貴族に二言はありません」
「さすが、エーデ！好きになっちゃいそう！！」
エーデの顔が赤くなる
「っ！……な、なにを言ってるいますの」
「おごってくれるからな」
「そんな…ことないですわ、それでは放課後…」
そそくさと去って行ってしまった。

～ウルスラ庁前・レストラン～
「ここは……」
ウルスラ庁前にあるレストランは、全て貴族向けで高い！
そんな中の一つに入って行く。
「ついてきなさい」
「は…い…」

外観は、凄い。
それしか、言い表せない。うん。
「予約していた。エルフリーデ・アーガイルよ」
「これはお持ちしておりました。どうぞ中へ」
「行くわよカイト」
「わかった…」
中に入ってみるとシャンデリアがかかっていて、テーブルがとってもきれいな模様になっていた。
「どうぞ」
椅子を後ろに下げてくれるみたい
「どうも…」
「注文は何にしましょう？」
「これとこれとこれで」
メニューを指さして注文している姿が目に入る
「はい、かしこまりました。」
こちらは緊張しっぱなし。
「緊張する事なんてありませんわ」
「いや、普通は緊張するだろう？」
「鳴れてしまいましたわ」
「凄いな～」
「こんなの凄くもなんともありませんわ。ただ親のお金を使っているだけなんですから」
「それでもだよ」
「そうですか」
会話が途切れ、時が止まり。
時間が進んでいく

「お待てせしました」
食事を持ってきたことで時間が進んだ。

目の前に出されたのは、俺が食べたことのないものばかりだ。
「おぉーー！！おいしそう」
よだれが垂れてきてしまった
「それでは食べましょう」
「は～い！パクパク、モグモグ。うまいな～これ！」
「そんなに焦って食べなくても…」
「いや、だってここまでの物たべたことないぞ」
「喜んでくれるなら連れてきたかいがありましたわ」
「あぁ、感謝してるぜ」

ものの数十分で食べきり
「うまかった～～～」
「本当によく食べましたわね」
「エーデ、ありがとうな」
「そんなこの程度たいしたことないですわ」
エーデが少し喜んでいる顔をする。
「エーデの評価を改めないとな」
「お金は、自分で稼いだものではないから自慢できませんわ」
少し怒ったような悲しそうな顔をしているエーデ。
そんな顔を見て何も言う事が出来なかった。
「そう…か」
「そうですわ、親から地位や金をもらって威張っている貴族は、タダのくずですわ」
「そこまでいうかよ…まぁ落ち着けって」
少し時間がたち、顔色が戻ってきた。
「すいません。取り乱してしまいました」
「気にするなって」
お金とか地位を気にしているようだ
「私の兄がそうだったんです」
「えっ…お兄さんが！？」

「いえ…やっぱり何でもないです」
「そうか」
エーデの顔を見てこれ以上聞く事が出来なかった。
「それでは」
その後走って行った。
その後ろ姿が寂しそうに見えたのは気のせいだろうか・・・
次の日にエーデに会った時は、何事もなかったような顔をしていた。

第１２話　テヴェテンテの休日

～休日～
今日は、お金がないため休日返上で働くことにした。
「よっし、いっちょうやるか」
朝市にテヴェテンテに訪れた。

～テヴェテンテ～
「こんにちは～～」
「おや、カイトかいどうしたんだい！？」
まだ、開店もしていない時に現れた俺をみて驚いた顔をしている。
「お金がないもんですから、働かせてください」
「なるほどそういう事だったんだ。わかった」
納得がいったようで快く承知してくれた。
「それで…何すればいいんですか？」
いつも、夜に行っているため主な仕事が掃除に注文、会計といった程度の仕事だ。
「そうだね～それじゃあ、フィオナと一緒に買い出しに行ってくれないか？」
「いいですよ～」
買い出しぐらいなら大丈夫かとタカをくくっていた。
「フィオナ～～～！！買い出し頼んだよ」
おばさんが大きな声で呼んだ為、奥からフィオナが出てくる。
「了解、お母さん……って何でカイトがいるの？」
こちらに気付いた時、何でいるのか不思議そうな顔をしている。
そりゃ、休日は休むって宣言してたんだから・・・
「お金がなくて…」
その一言で全てを悟(さと)ったような顔をする。
「なるほど」

「そういうことで、2人ともよろしく！今日は業者に頼んで運んでもらわなくていいから節約になるし」
「そうだね！」
2人の笑みは、ドラゴンでも殺せそうなぐらい冷たかった・・・
俺は、荷台を持っていくことになった。
「こんなものあったんだな」
「何かと便利だと思う」

～テヴェテンテ前～
「それじゃあ、カイト行こうか？」
「どこからだ？」
「まずは、軽めなチーズ屋からにしようかな」
「了解！」
この時は、フィオナの言葉を理解できていなかった。

～チーズ屋～
「おじさん、いつものください」
「わかった」
チーズ屋のおじさんは、フィオナを見ただけですぐに準備に取り掛かった。
手際が良く、ものの数分で終わった。
「はいよ…カイトじゃないか！！」
前に祝勝会であったのを覚えてくれてたらしい
「どうも～」
「何(なん)だ。こんな朝早くから働いているのか」
「はい、お金がなくって」
「かぁーーーー。そんなことに青春をささげてちゃあもったいない！あっ、でもフィオナちゃんがいるか！！」
「っ！？……ちょっとおじさん」
何やら顔を赤くしてあたふたしているフィオナが必死におじさんを

説得しようとしている。
「おじさん、これはお母さんに頼まれて。私は関係ない」
「はいはい、そういうことにしといてあげるよ！フィオナちゃん」
「ううっ」
顔を隠してしまう
「ほら、フィオナ次行くぞ」

「もうカイトの馬鹿……ぶつぶつ」
なにやら小言でつぶやいているようだった。
「ほら、いくぞ！」
「もう、わかった。次は野菜屋」
すねたような顔をしていってしまう。
「おい、ちょっと」
慌てて追いかけた。

～野菜屋～
「おばさん、こんにちは」
「こんにちは、フィオナちゃんかい。ちょっと待っててね」
フィオナが紙を渡したら、テキパキと野菜を集めて
「はい、どうぞ」
「ありがとう。さあ次、酒屋」
「はいはい」
荷台にどんどん荷物が乗せられていく

～酒屋～
「おじさん、このお酒多めにください」
紙を渡して指をさしている
「はいよ」
「ありがとう」
そしてすぐに持ってきて荷台に乗せる

「次、肉屋」
「りょう…かい……重い…」
荷台の重さがどんどん増していく

〜肉屋〜
「いつものください」
「フィオナちゃんかい、わかった」
手慣れた様子で切って入れる
「はいよ」
「ありがとう」
たくさんの袋をもらって荷台に入れていく
「カイト次は魚屋」
「まだ…あるのかよ…」
荷台が折れそうなぐらい重いんですけど・・・

〜魚屋〜
「ありがとう」
フィオナが魚屋のおっさんにお礼を言っていった。
相変わらず、フィオナの顔を見ただけで手早く準備している。
「はい、これで終わりだよ。カイト」
「やっとか、でもこれを持っていくのは骨が折れそうだな」
後ろには、いったいどうやって積み重ねたのかわからないぐらいたくさんの物が載っている。
これを持って帰るのは結構つらい
「いつも、フィオナが持っているのか??」
「違う。いつもお金を払って運んで貰っているの」
「なるほど…ていうか何で今回は違うんだ!?」
「だって、カイトがいるし……お金の節約になるから」
最後の部分は、ボソッと言った。
「まぁ、テヴェテンテの役に立っていればそれでいいのだけどな」

「早く帰ろうか」
「了解」

今回の買い出しで、フィオナの休日が見れたからまぁいいかな
それに、フィオナが周りの人から好かれている事もわかったし・・・

「カイト速くして！」
「おいおい、ちょっと待ってくれよ～～～…おもい……」
朝日が昇りっきた空の下で荷台をせっせと運んでいた俺だった・・・

休日のテヴェテンテは始まったばかりだ。

～お昼～
「へぇ～結構(にぎ)賑わっているな」
夜と比べると少ないが、ただの定食屋になっている昼間に客が入っているのは意外だ。
「カイト、会計お願い」
「了解」
フィオナも忙しそうにちょこちょこと走っている。

結局自分たちがお昼ご飯を食べたのがおやつの時間のちょっと前だった。
「カイト早く食べて」
「あぁわかった」
フィオナがせかしてくる。
この後は、すぐに3時の時間でカフェとなるらしい

「この店凄いな」

昼は、定食屋。おやつは、カフェ。夜は、酒屋。
「いまさらだよ」
当然なような顔をしているフィオナだったがどことなく嬉しそうだった。

「がらっがらだな…」
3時を過ぎて、もう少しで夕日が見える。
「たまたま……だよ…」
「本当か？」
未だに席が一つか二つぐらいしか埋まっていない。
しかも、酒を頼んでいる客もいる。

「正直言うとこの時間帯が一番少ない」
「やっぱり…」
「どうしようか考えてはいるんだけど…なかなか思い浮かばない」
「頑張れ！」
励ましの言葉が思い浮かばずに困る・・・

そこから、夜になると俺も知っているテヴェテンテんなる。

「カイトいつも通りだから」
「よしきた」

そうしてあっという間に時間が過ぎて行った。

今日は、テヴェテンテの休日がわかった。

その後筋肉痛になったのはいうまでもない

休日に働くのはほどほどにってね。

第13話　フィーナのお仕事

今日は昨日の筋肉痛がひどく。
テヴェテンテにはいかなかった。
それなので、昼過ぎから街をぶらぶらすることにした。
来てからいろいろなことが一気にありすぎて大変だったからたまには、こういうのも、いいかな。

市場によってみると、
「へいっ！いらっしゃい」
「今ならこの織物安くしておきますよ！」
「とても珍しいこの宝石どうですか～！」
様々な声が聞こえてくる。
周りは、市場で来るお客でにぎわっている。

虫が一切よりつけないぐらいの人の多さだった。
「ここじゃ、ゆっくりできないな」
人が多すぎたので、市場を抜けてあるいていく。

そうすると、住宅街に出てくる。
家が一戸建ての家よりかは、アパート系の共同住宅が多い場所。
始めてきてみたが、なかなか雰囲気がいい。
洗濯物が干しあり。子供たちが道で遊んでいる。
近くには、木が植林されており、小鳥たちもあるまっている。
「今日はいい天気で、本当にいいな！」
ぐっと背伸びをして一息つく。

このまま、先に行こうとした。

そうしたら、上から人がきた。
「うん！？何だ？」
よく見てみるとほうきにまたがったフィーナだった。
「お～～い！！フィーナ何しているんだ！！！」
大声で叫んだら。
方向転換しこちらに来た。
「やっぱりフィーナか！」
フィーナがほうきからおりる。

「カイトどうしてこんなところ？？」
「まぁ暇だったからな」
「なるほど」
やけに簡単に納得された。
俺ってそんなに暇そうに見えるのかな？
「フィーナこそどうしたんだ？」
「私はクエストを受けている」
「くえすと？？？何？」
「カイト知らないの？あっ、説明されたのがカイトとの来る一か月前だったんだ。」
「なるほど、それでクエストっていうのは？」
「クエストは、学校の掲示板から受けられる任務でレベルにあった報酬がもらえるの私たち学生にいろいろな任務を受けてもらって経験を積ませるのにいいからあるんだよ」
「そんないいのがあるのかよ！？」
「なんで！？」
「てっとり早くお金が稼げるじゃん」
「カイトには無理だと思う」
「何でだ！？」
「だって魔法を使うのがほとんどだもん」

「まじで！？」
「本当。」
「そうか～ところでフィーナは何してるんだ？」
「宅配便のお仕事。」「それなら、俺にもできるな！」
「たぶん無理だと思う。」
「いや、足には自信あるぜ～」

「この都市中を回らないといけないから」

「はっ！！」
都市中とは規模が違う
「フィーナは、さっきみたいに飛んでるから楽なんだ」
「そう、これも魔法のおかげ」
「魔法は便利だな」
「乗ってみる？」
「おぉいいのか」
「あと3件で終わるからそれぐらいなら一緒に来てもいいよ」
「ラッキーそれなら載せてくれ！」
「いいよ」

フィーナは、ほうきにまたがる。
「どこに乗ればいいんだ？」
「棒のところにお尻を横に乗せる」
「なるほど」

棒の上に乗る。
乗り心地が悪い。
「つかまって」
言われた通りに腰に手を置き、抱きしめたような姿勢になる。

「キャ！！」

「大丈夫か？」

「……大丈夫…っ…。」

フィーナの横顔しか見えないのだが少し赤くなっている。

「…飛ぶね」

その言葉と同時にほうきが浮く

「わぁわぁー！！」

「落ち着いて大丈夫だから」

「すまん」

急に軽くなったみたいな感じになった。

「これが魔法！？」

「そう、風の４以上じゃないと使えない」

「そうなんだ～」どんどん上がっていく

「雲の上まで行くのか？」

「そこまで上がったら街が小さすぎて見えなくなる。」

「そっか」

たしかにどうしよもないことだがあまりに凄かったので考えが回らなくなった。

「どう！？」

「あぁ凄いな」

「それだけ？」

少し不満そうな言葉遣いだった。

「いや、あまりにも凄すぎて感想がない。」

「ふふぅ」

急に笑い出した。

「なんだよ」

「カイトの驚いた様子がわかっただけで今日は嬉しい。」
「そうかよ！」
「このまま押し以後と終わらせるね」
「了解！」

そのまま下に下がっては空に行きの繰り返すこと2回目
「これでよしっと」
「終わったか？」
「これで終わり」
「報告とか行かなくてもいいのか？」
「それは、学校があるときに報告すればいい」
「なるほど」
「それでカイトこれからどうする？」
「あぁまたどこかをぶらつくかな？」
「ふ～ん。それじゃあ、このまま遊覧飛行はどう？？」
「えっ！いいのか？」
「もちろん。そんなにカイトが喜ぶならいいよ」
「ありがとうな、フィーナ」
「それじゃあ、行こうか」
「わかった」

そのままどんどん上に上がっていき雲の少し下あたりまで来た。
「そういえば何でさっきから風が当たらないんだ！？」
「それは、風で周りを防いでいるから、だから空気も大気も地上と同じ」
「それは便利だな」

「このまま、街を一周してみよう」
「あぁいい考えだな」

そのまま街を一周し始めた。

人が点々みたいに見えて面白い。

「あれが学校で…あれがウルスラ庁か！」

思い出深い場所が小さく見える。

「なかなかいい景色だな」

「それはどうも」

フィーナが笑ったように見えたのは気のせいだろうか・・・

「あぁ夕日が…」
「もうそんな時間か！」

夕日がきれいに見えた。

夕日が見えるオレンジ色の世界は、少しだけ優しげな色に見えたような気がした。

「ありがとうなフィーナ」

「えっ何！？」

「何でもない」

そんなレアな経験をさせてくれたフィーナに心の中でもう一度感謝した。

第１４話　フィオナとカイトの危機一髪

～テヴェテンテ（夜）～
今日もテヴェテンテで働いている。
「どうだ、おかしいと思わないか」
「おかしくない」
雑談をしていた。
「おい、あんた達仕事しないか！！」
「りょ～かい」
「わかった」
おばさんの一言で仕事を再開した。

その後給仕のお仕事をするのだが
「なんだカイトか…野郎に興味はねえ」
「こっちだって、野郎に興味はないわい！」
「なんだと、この野郎文句でもあるのか？あぁ」
こっちも頭に来たぜ・・・
フィオナが走ってこっとに来て
「お客様すいません。カイトはあっち行って」
手でシッシとされた。
「わかったよ」
「フィオナちゃんごめんな取り乱しちゃって」
さっきの奴もう顔の色変えてやがる。
確かに俺も男よりか女の子に持ってきてもたった方が嬉しいのだがね～
あの扱いは、どうかと思うよ

その後も・・・
「なんだフィオナちゃんじゃないんか、なら注文や～めた」

「フィオナちゃ…ってカイトか、まぁいいや。ほら注文聞け」
「男が来てもちっとも嬉しくないんだが」
あぁーーーー今日はいつにもまして最悪だ！！
いつものなら、2，3このようなことがあるだけなんだが
今日は、行った先全てで言われている

「なんだよ、フィオナ、フィオナって！」
「なんだい？嫉妬でもしているんかい」
おばさんが不気味な笑みをしてた
「まさか、言った先々で愚痴を言われたらそうもなりますって」
「フィオナに興味ないのかい？」
「はい、まったく《・・・・》ないです」
フィオナは可愛いいが、ただの仕事仲間だし
「あらそうかいそうかい」
おばさんの顔が引きつっていた。

この時まさか、後ろにフィオナがいるなんて知らなかった・・・

その後・・・
「おい、フィオナ皿取ってくれ」
「自分で取れば」
「フィオナ、会計やってくれないか」
「今、忙しい」
なぜか、フィオナの機嫌が悪いらしい
店じまいをして、掃除をする。
「なぁ、フィオナどうしたんだ！？」

「何でもない」
フォオナは床磨きをしていた
「ワセラ（水）」
魔法で水を出しながら掃除をしていた
「便利だな、魔法って」
『ゴシゴシ』
会話が続かない。いや続けようとしてくれない

「カイト！嫌われたもんだね～！」
おばさんがにやけて言った。
「何（なん）でしょうか？」
「自分に聞いてみるんだよ！！」
呆れた顔をしている。
「いじめですか、おばさん」
「こればっかりかは、自分でわからないと」
「そうですか……」

フィオナは口が閉ざさしたままで、どうしよもなく帰ることにした。

～学校・中庭～
「どうしたらいいんだろうかね～」
昨日のことが気になる。
「どうしたんですか？カイトさん」
フィーナがこっちに来た
「あぁ、フィーナか。それがなフィオナの機嫌が悪いんだよ」
「何か気にさわることでもしたんですか？」
「いやーそれが、昨日働いて突然なんだ。何か言った覚えもないし…」
「それなら原因は、カイトさんですよ」
確信めいた顔をしている。

「なんでだよ～」
「カイトさんと話した時です。絶対です」
「だから、何でだよ！」
分からなくって、少しイライラしていしまい咄嗟(とっさ)に手が出てしまう。
そしてフィーナの手を握っていた。
「……っ！」
その時、体に何かが駆け巡る。
「すまん…熱くなりすぎた…」
「いいですよ別に」
顔を隠しながら帰って行く。
「しまったな～頭でも冷やしに行くか」
自分に反省をした。

～川～
「ふぁ～～全然釣れね～」
あれから結構時間がたつが一向につれない。
いちおう、釣りは得意な方だが一向にかからない。
「そういえば、前におばさんが、フィオナは、よく川に泳ぎに来るって言ってたけど来ているのかな??」
ちょっと期待をした。
「フィオナいないかな～?」
周りを見ていると・・・
「助けて～～～!!!」
流された男の子がいた。
5～6歳位かな?
「おい、すぐ助けてやる」
こちらとは反対側に近かったために助けるのが難しかった。
「くそっ！」
走ってどこかいい所がないか探そうとしていた時

『ザバッン』
「フィオナ！」
フィオナが飛び込んでいた。
泳ぎは、魚のようにスイスイと進んでいた。
「おう、大丈夫だからね」
「おぉーーー！！」
助ける事が出来た。
「お姉ちゃん前！！！」
「え……！！」
その光景に唖然とした。

フィオナが岩に激突したのだ！
「フィオナ！！」
その反動で岩にしがみつけた男の子だが・・・
フィオナは、依然流されたままで溺れかけたままだった。
「フィオナ！！何かないか！？」
周りを見渡しても木の枝ぐらいしかなかった。
「あ…ぷっ…あ…たす…け…て……カ…イト」
「一人ぐらい守れないのか俺は！」
ここで魔法が使えない自分を恨んだ
「何かないのか何か」
自分で泳ぐ
「よしやってみよう。待ってろよフィオナ！！」
『ザバッン』

「よし、捕まえた」
しっかりと抱きしめた
「カイト」
「体が冷えてる早くあがらないと」
「カイト後ろ！！」

このパターン嫌な予感がする・・・・
「ガハッ」
後ろに激痛がした。
「カイト…大丈夫…」
「あぁ…で…もまずいかも」
2人ともタイミングを完全に失った。
流されっぱなしで体力の消耗が激しくなる。
「どうすれば！？」
「カイトだけでも助かってよ…私の最後に魔法を使って陸までなら上がれると思うから」
とっても清々しい顔をして言う。
「そんな選択肢はねーよ。俺たちが選べる選択肢は一つ！2人とも陸に上がる！！」
「でも、する方法が・・・」
「俺が奇跡の一つや二つ起こしてやるぜ！！」
願った2人とも助かるように・・・・・
なぜだが、力を持てたような実感があった。なぜだが・・・

……。

「カイト！！」
驚いた顔をしていた。
「どうしたんだフィオナ？」
「私たち立っているよ！？」
「え…本当だ…」
必死すぎて気づかなかったけどお尻が痛い。

「川が真っ二つに割れている…」
水の中にいたはずだが、川が一直線にさけていた。
「やった！助かったぞフィオナ！！」

「カイトやったね」
2人で陸まで上がった
そのあと、救出部隊の人たちが来た。
ちょっと遅いかな・・・

「はぁ～今日は散々だぜ」
「あの時間何が起きたの？」
「さぁ～わからない。もしかしたら、近くにいた人が救ってくれたかもな」
「その人は？」
「何も言わずに去って行ったとか！？まぁいいじゃないか」
「うん」
少し納得のいかない顔をしている。
「ところでカイト、どうして川にいたの？？」
「たまたま息抜きに釣りにしに来てたんだ」
「偶然？」
「いや、前おばさんからフィオナはよく川に来るって言われてたから」
「私を探しに？」
「あぁそうだよ、昨日のこと謝っておきたくてな」
「そんな事で…」
「そんな事がとても重要だぞ」
「そう…かな！？」
「うん、とっても……」
笑いながら言った。
「そうだよな」
「そう」
2人して笑った。

夕日の中、2人は笑いあった。

フィオナの川の反射で赤く染まった笑顔は、最高だった。

どんなに喧嘩しても・・・

仲直りしたいっていう、素直な気持ちが

見えない距離をつないでくれるだろう

そして、見えてくるはずだ。どんな距離なのかが・・・・・

その後・・・

「カイト皿取って」

「あいよ」

「カイト。レジお願い」

「はいはい」

「カイト。注文取りに行って」

「りょうかい」

散々こき使われたとさ・・・お終いお終い

な、わけあるか！！

こっちの方が大変だーーーー！！！

なぜかフィオナの機嫌がよくなっているし・・・・・

「はぁーーー」

深いため息をついてしまう。

～学校・校長室～

「ふぉふぉふぉーようやく使えるようになってきたか…」

「もう少しじゃのう……」

モーガンが笑っていた。

第１４話　フィオナとカイトの危機一髪（後書き）

ここで完結したのは、あくまで休載処置です。

今から、「魔王と勇者のタクティクス」に専念していきます。
なのでこれから書けないと思ったために完結としておきます。

作者自身、これ以降のお話は考えてあるのでまた時間が見つけれたら連載を開始していきたいと思います。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2015x/

Making Magic Seed

2011年10月27日18時06分発行